

26

新城

新城中学校

ソ      ボ      カ      ナリ  
-----  
素   保   花   成

分科会番号 1

分科会名 国語教育（作文その他）

「詩の種」を集め、「詩の技」を創作に生かすことで、  
表現を工夫し、自分の力で詩を書きすすめることができる生徒の育成  
～1年国語科 詩の創作活動を通して～

## 1 主題設定の理由

本学級の生徒は、1学期に実践した文詩集「みかわの子」に応募する詩を創作する学習で、全体に指示を出して創作を開始すると「何も書くことない」「何も思いつかない」などの声が上がリ、困っている様子がみられた。生徒と既習の教科書の詩を一緒に見ながら助言すると、書き始めることができたが、詩の題材を探すことは多くの生徒が苦勞していた。このことから、日常生活から詩になりそうな題材を探して、集めておくことが必要なのではないかと感じた。詩の題材を日常生活の中で集め、記録に残していくことを「詩の種集め」と名付け、生徒に取り組ませれば、詩を書くときに題材探しで困らないのではないかと考えた。

生徒たちには、自分の心が動いた出来事についてリズムを工夫したり、表現を工夫したりして、詩を創作してほしい。そのために、詩の特徴の一つである表現技法を知識として知っているものから、実際に使えるものにしたい。そこで、表現技法が効果的に使われている詩を鑑賞し、その中で使われている表現技法を生徒たちに見つけさせる。見つけた表現技法を「詩の技」として取り上げ、その技の効果を自分なりの言葉でまとめさせて詩の創作に生かせるようにすれば、「詩の技（表現技法）」を効果的に使う詩の書き方が身につくのではないかと考えた。

生徒の実態をふまえた上で、自分で書きたい題材を決め、表現を工夫して詩を書きすすめることができる生徒を育てたいと強く思い、研究主題を設定した。

## 2 研究の仮説と手立て

### 仮説1

日常生活で詩の題材となりそうな出来事を「詩の種」として記録に残していくことで、自分で題材を選んで、詩を書きすすめることができるだろう。

### 手立て1

日常生活での面白かったことや感動したことを、タブレットの授業支援ソフトを使用してメモや写真で残していく。そうすれば、詩の創作時には集めた種から題材を決め、自分の力で書きすすめることができるだろうと考えた。

## 仮説2

詩の鑑賞を通して「詩の技」の効果について考え、その効果を自分なりに理解することで、表現を工夫して詩を創作することができるだろう。

## 手立て2

生徒が詩の題材を共感的に捉え、「詩の技」のよさを理解できるように、本校の学校文集より、卒業生が創作した詩を中心に教材として提示する。詩の鑑賞を通して、「詩の技」の効果について話し合い、考えた効果を教室に掲示する。本実践では、「反復法」「擬人法」「比喩」に焦点を絞り、自分なりにそれぞれの「詩の技」の効果を理解することで、創作に生かしていけるのではないかと考えた。

## 3 研究の方法

本研究を進めるにあたり、2人の抽出生徒A、Bを中心とし、授業での発言や振り返り、創作した詩を通して、仮説を検証していくこととする。

### (1) 生徒Aの実態と願い

資料2は生徒Aが1学期に書いた詩である。短い言葉でまとめた日記のようである。生徒Aが題名にした

「毎日の出来事の大切さ」が伝わる内容にはなっておらず、

表現の工夫もみられない。題名に生徒Aの伝えたい思いを感じるのでも、その思いが読み手に伝わるためにはどのように表現を工夫すればよいのか、具体的に書き方を学ばせる必要がある。以上のことから、「詩の種」を集める活動を取り入れること（手立て1）で、自分で題材を決め、書きすすめる姿を期待したい。

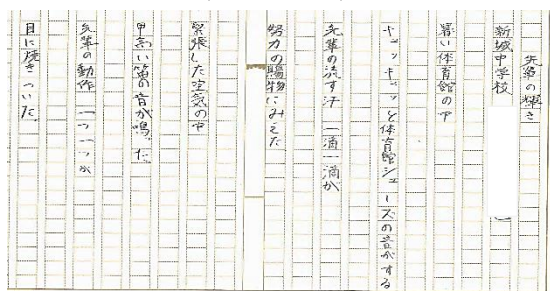
### (2) 生徒Bの実態と願い

生徒Bは、自分の考えをしっかりともち、話し合い活動に積極的に参加し、書く活動にも前向きに取り組むことができる。しかし、題材を決めるのに時間がかかってしまい、書く時間が少なくなってしまった。資料3は生徒Bが1学期に書いた詩である。表現の工夫はみ

られるが、自分の思いが読み手に伝わるようにこだわって書く姿はみられず、あっさりと書き終えてしまった。この様子から、生徒Bは登場人物の心情や授業の振り返りはポイントを押さえてしっかりと書くことができるが、詩のように自由に表現してよいとなると、読み手に自分の思いが伝わるように、表現を工夫して描くところまではできていないことがわかる。以上のことから、「詩の種」を集めること（手立て1）で、短い時間で題材を選び、



【資料1 生徒Aの1学期に創作した詩】



【資料2 生徒Bの1学期に創作した詩】

「詩の技」の効果を考えて理解すること（手立て2）で、表現を工夫して詩を書きすすめる姿を期待したい。

## 4 実践と考察

### (1) 詩の種を集めよう（手立て1）

詩の技の効果について考える詩の鑑賞の授業後（手立て2）には、扱った詩の題材に影響を受け、詩の種集めの視野が広がり、季節の変化を感じられるものを写真に残したり、身近な物の写真を撮ったりする生徒がいた。

生徒Aはタブレットでの活動に「これならできる」と前向きになり、最初はどの出来事を詩の種として残そうか考えながら楽しそうに活動に取り組んでいた。友達ともどんなことを記録に残しているのかを話しながら、すぐに3個集めた。しかし、3個集まると、この中から選べばいいと考え、後半には活動に対して後ろ向きになってしまった。

生徒Bは、出来事を絵で描いたり、自分が感動した景色を写真に残したりしていった。友達の詩の種集めの様子を参考にしながら、さまざまな視点で詩の種を集めることができた。ノートに書き残していくのではなく、タブレットで簡単に記録できることから、1か月間継続して14個の詩の種を集めることができた。

### (2) 「詩の技」の効果を考えよう（手立て2）

#### I 「反復法の効果を考えよう」

本授業で提示した詩（資料3）をもとになぜ同じ言葉を繰り返すのかについて考えた。

生徒Aは「大事だから」と考え、全体に伝えた（資料4）。教師が「なぜ大事なの？」と問い返すと、「題名とつながっているからです」と答えた。生徒Aのこの発言に対して、生徒7が「本当だ。題名とも関わりがある」と反応し、その後も生徒Bが「作品の中心」という言葉で、題名と反復法がつながることで作者の伝えたいことが明確になると考えた（資料4）。

#### II 「擬人法の効果を考えよう」

本授業で提示した詩は、誘惑となる物を擬人法を用いて表現していることが特徴である（資料5）。擬人法の効果を考えてるために、擬人法の表現（詩①）に対して、教師が創作した詩として擬人法が使われていない表現（詩②）を提示した（資料6、7）。詩②の表現をみせると、生徒Aが「先生の詩はふつうだよ」とつぶやき、他の生徒も同じように反応した。生徒Aのつぶやきを取り上げ、「なんで詩①の方がみんなはいいの？」と投げかけると、擬人法の効果について生徒たちは話し始めた。

「使えない言葉」  
 バカヤロウうるせいムカつく  
 大きな声で言ってみたいときがある  
 人の気も知らないで  
 人の言うことまかないで  
 言われるのはいやだけれど  
 なぜかわかるその言葉  
 バカヤロウうるせいムカつく  
 小さな声で言ってみる  
 少し心臓がドキキした  
 大きな声で言ったらどうなるのだろう  
 親に言ってみよう  
 友達に言ってみよう  
 先生に言ってみよう  
 紙に書けば短い言葉  
 バカヤロウうるせいムカつく  
 自分が自分でなくなるように  
 使いたくても使えない  
 そんな悪いのくりかえし

新中二年生

【資料3 提示した詩】

教師：なぜ同じ言葉を繰り返すのだろう。  
 生徒A：大事だからです。  
 教師：なぜ大切なの？  
 生徒A：題名とつながっているからです。  
 生徒7：本当だ。題名とも関わりがある。  
 生徒B：繰り返すと作品の中心だと伝わりやすいからだと思います。  
 生徒8：たしかに中心の言葉だね。

【資料4 授業記録（一部抜粋）】

「テスト前日」  
 新中二年生  
 マンガが呼ぶ「さあ、読め。」と  
 ベッドが誘う「あたたかいいぞ。」と  
 テレビが笑う「おもしろい。」と  
 （テスト前日）  
 いろんな障害が僕の前に立ちちはたか  
 机を掃除したいとか  
 髪を洗ってさっぱりしたいとか  
 それらを乗り越え勉強に  
 と想いは寝る時間

【資料5 提示した詩】

【資料6 詩①】  
 マンガが呼ぶ  
 ベッドが誘う  
 テレビが笑う

【資料7 詩②】  
 マンガをよみたい  
 ベッドをねたい  
 テレビをみたい

【資料6 詩①】

【資料7 詩②】



生徒Aは「物が話しているのは不思議な表現で、面白い」と発言した。生徒Bは、詩②の表現を「現実的である」と考えたことに対して、詩①の擬人法の表現は「読者を自分の世界に呼び込むことができる」と発言し、読み手側の視点に立って、その効果を考えることができた（資料8）。

### Ⅲ 「比喩の効果を考えよう」

まどみちおの「ふろばで」の詩を提示した。この詩には前回学習した擬人法が用いられていたり、ふろばの様子を比喩で表現したりしている（資料9）。

生徒Aは「形や色が分かりやすい」と想像しにくいものを想像できるようにしたり、相手により正確に自分の伝えたいことが伝わるようにしたりできる、といった効果を考えて発言し、生徒Bは「場面や情景が浮かびやすい」と考え、発言した（資料10）。

### (3) 「詩の種」から題材を探し、「詩の技」を生かして創作しよう（手立て1, 2）

詩を創作するときには、友達と遊んだ楽しい時間や1日の生活で感じたことなど、さまざまな詩の種を集め、集めたものを見返しながら創作活動に取り組むことができていた。

生徒Aは、創作活動を始めると、詩の種集めからいつもとはちがった髪型を題材に選んで書き始めた。教師や友達に「何を書けばいいの?」と聞くことはなく、何を書いていいのかわからないと悩む様子はみられなかった。書いて記録するのではなく、タブレットで簡単に記録を残せたことから、詩の種を集めやすかったのではないかと考える。生徒Bは、1学期は詩を書き始めるまでに時間がかかっていたが、詩の種集めで事前に準備ができていたことから、集めた詩の種から寝癖を題材に選んですぐに書き始めることができた。

詩を創作しているときは、今まで自分たちが見つけてきた詩の技の効果が書かれた揭示物を確認しながら書き進めている生徒の姿がみられた。

生徒Aは、最初は髪型の様子を言葉で細かく説明して書いていたが、揭示物を確認して、「比喩で表現すればいいのか」とつぶやき、髪型を比喩表現で表すことで、自分の髪型を読み手が想像しやすくなるようにした。また、生徒Aは題名にもこだわりをもって考えていた。「題名からインパクトがあるものにしたい」と悩んでいたため、教師が「この詩で何を伝えたいか考えてみたら」と助言をすると、「そうだ、発表会と表現すればインパクトが出ていいかも」と話し、題名を「寝癖の発表会」とした。反復法の授業のときに、題名と本文とのつながりに気づいたことを思い出し、最後につながる連を取り入れようと考え、

生徒9 : 心情がわかりやすいです。  
 生徒10 : 詩②は自分の心情であるのに対して、詩①は物に対する心情が書かれている。  
 生徒11 : ありえない表現をして、目立たせているのがいいと思います。  
 生徒A : 物が話しているのは不思議な表現で面白いと思いました。  
 生徒12 : 生徒Aに似ていて、非現実的な表現がいいと思います。  
 生徒B : 詩②は現実的で、詩①は読者を自分の世界に呼び込むことができるのではないかと思います。

【資料8 授業記録（一部抜粋）】

「ふろばで」  
 まどみちお  
 しほる手に  
 ちからをこめると  
 かかっている水が  
 どつと おちる  
 まるで ゆうだちだ  
 さて そのタオルを  
 雲のように ひるげて  
 天の上で  
 からだをふいていると  
 うるさいのは  
 げかい はるかな  
 あしゆびこそうたち  
 | ゆうだち ふれえ  
 もつと ふれえ  
 もう ふらないのか  
 けちんぼう

【資料9 提示した詩】

生徒A : インパクトが与えられるし、形や色がわかりやすいと思いました。  
 教師 : わかりやすいとどんないいことがあるの?  
 生徒A : 相手に正確に伝わるようになるからです。  
 生徒B : 場面や情景が浮かびやすいと思います。

【資料10 授業記録（一部抜粋）】

本文と題名がつながるように考えて詩を書き上げることができた。

生徒Bは、寝癖が直らない様子を面白く伝えたいと考えた。今まで詩の技を学んできたことを通して、詩の技で読み手の気持ちが変わることに気づいたことから(4頁 資料9)、読み手が楽しくなるような詩を創作したいという思いをもち、表現を工夫して書くことができたのではないかと考える。反復法の授業で、作品の中心になり、伝えたい思いが伝わりやすいと考え(3頁 資料4)、反復法も取り入れたいと考えた。また、授業のときには出てこなかったが、自分の創作した詩を読んでいると、教師に「反復法ってリズムも生み出す」と話した。新たな効果にも気づき、その効果を生かしてリズムも工夫をして反復法を取り入れて詩を書きすすめることができた。

## 5 研究の成果と課題

### (1) 仮説1の検証

生徒Aと生徒Bの詩の種集めを行う姿や創作時の姿から、仮説1の検証を行う。

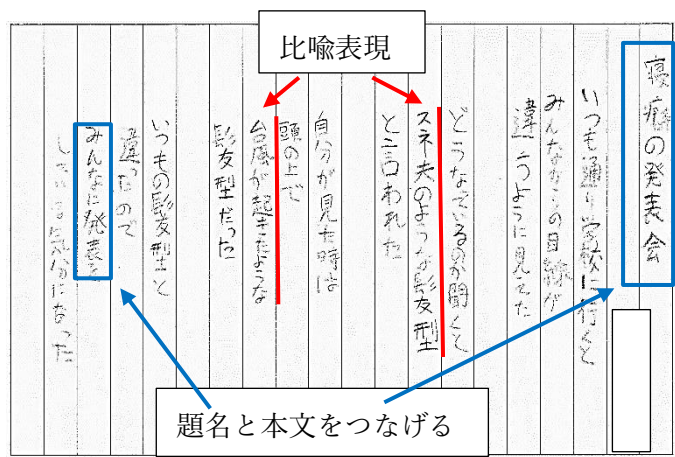
本研究を行う前の生徒Aは、自分の考えを書く活動になると、具体的に何を書いているかわからないことから書くことに苦手意識があり、1学期に詩を創作した際にも、書き始めるのに時間がかかってしまったが、詩の創作時には、自分が集めた種から詩に書けそうなものを自分で選び、題材を決めて書きすすめることができた(4頁 線部)。

生徒Bは、何を書くのか決めることに時間がかかっていたが、自分が感じていることや、印象的な出来事などを詩の種として記録に残しておいたことで、その中から選んですぐに書き始めることができた(4頁 線部)。

本研究を通して、タブレットを使って詩の種を集めておくことで、詩を創作するとき題材を自分で決めて、書きすすめる姿がみられた。タブレットで簡単に楽しく詩の種集めができたことで、何を書けばいいのか困ることなく、書きすすめることができたのである。他の生徒も、詩の種集めをもとに題材を自分で決めて書きすすめる姿があった。このような生徒の姿から、仮説1は有効であったと言える。

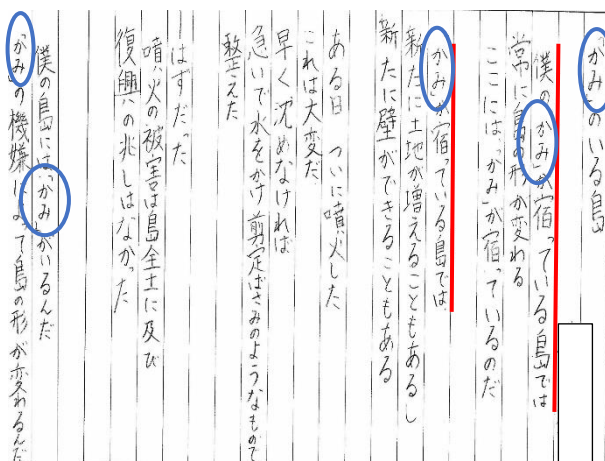
### (3) 仮説2の検証

資料11は、生徒Aが今回創作した詩である。自分の髪型を読み手に伝わりやすくするために、「形が伝わりやすくなる」(4頁 資料10)と考えた比喻表現を用いて、表現することができた。また、詩の技の効果を考えていく中で、題名とのつながりの大切さにも気づくことができた(3頁 資料4)ため、自分で見つけた工夫を取り入れて、題名と本文のつながりにもこだわって作品を創作した。



【資料11 生徒Aが創作した詩】

資料12は生徒Bが創作した詩である。詩の技の効果を考えていく中で、教師が取り上げようと考えていた詩の技以外の表現の工夫をみつけることもできたことから、自分で見つけたひらがなで書く表現の工夫をさらに発展させて、掛詞の修辞技法を用いて、「神」と「髪」をかけて、寝ぐせはかみの機嫌によって変わるという工夫をした。さまざまな詩を読むことで、自分なりにその詩の技の効果を見つける力もつけることができたのではないかと考える。



【資料12 生徒Bが創作した詩】

反復法の授業で生徒Bは、反復法の効果「作品の中心だと伝わりやすい」と考えた(3頁 資料4)。その効果を生かし、自分の詩に反復法を取り入れて書いた。また、創作中に新たに「リズムを生み出すことができる」(5頁 線部)と見つけたことから、リズムも工夫した。以上のことから、詩の技の効果を理解したことで、自分の詩に取り入れて書きすすめることができたのではないかと考える。

## 6 本研究の課題

仮説1では、詩を創作する前に詩の種集めを行った。全ての生徒が集めてきた詩の種のもとに、自分で書く題材を決めて書きすすめることができた。しかし、生徒Aは、いくつか題材になりそうなものが決まってくると、題材集めをやめてしまった(4頁 線部)。他の生徒からも「何も出来事がなくて、種になることがない」といった声も上がっていたことから、題材になりそうなものをより具体的に提示する必要があった。詩の題材はどこにでもあるといったことに気づき、どんなことでも詩にできるといった詩の面白さを感じてもらいたかったが、約1か月間継続することは難しかった。詩の種集めにおいてさまざまな視点を与えたり、継続して行える工夫をしたりする必要があった。

仮説2では、詩の技の効果を考え、表現を工夫して作品を書きすすめることができた。その技を取り入れることで、表現にこだわって詩を創作する姿はみられたが、詩の技はどのような場面で使っていけばよいかわからず悩んでいる姿も見られたことから、どのような場面で詩の技が使えるのかを学んでいく必要があると感じた。本研究では詩の技に対して1つの詩だけを教材として提示したため、詩の技の使い方まで考えることが難しかったのではないかと考える。同じ技法が使用されている複数の詩を読み比べることで詩の技の取り入れ方を考える、などの手立てを講じるべきであった。

これからも生徒の実態に寄り添った手立てを講じることで、これらの課題を解決し、生徒たちが表現を工夫しながら、自分の力でさまざまなジャンルの文章や詩を書きすすめることができるよう、実践のあり方を研究していきたい。